

巖善平著

農村から都市へ

—— 1億3000万人の農民大移動

岩波書店 / 2009年7月 / 190頁 / 2310円



古澤賢治

はじめに

本書は、全一二冊からなる『叢書 中国的問題群』の第七分冊をなすものである。ここでは、いわゆる「農民工」（出稼ぎ農民）を中心に中国の人口移動についての問題が主に取りあげられている。中国経済のアキレス腱の一つが、農業に見られることは、最近の状況を見れば強調するまでもないことである。この問題は、とりわけ改革開放政策が始められた初期において、すでに強力に提起されていた。それが最近になって、農業の生産性の低さ、農村の疲弊、農民の貧しさといった「三農」問題として強調される形で、改めて重大視されざるを得なくなっている。

農村の疲弊と農民の貧しさは、都市と農村との所得格差をさらに拡大したり、全国各地における暴力事件や農民による地方の役人への抗議としての暴動事件につながったりして、農民の不満をめぐる様々な問題が提起されている。こうした深刻な諸問題に現れてきたように、こ

に中国経済の本質的な矛盾が存在すると
見ることが出来る。

本書は、サブタイトルに「一億三〇〇
〇万人の農民大移動」とあるように、人
口移動、とりわけ「農村から都市へ」向
かった農民の大移動を軸とし、状況変化
を計量的に示しながら問題点を明らかに
している。本書では、人口移動の意味
を、都市と農村との関係、さらに農民労
働者である「農民工」の置かれている状
況を巡る問題との絡み合いとして重要視
した。

内容構成

本書の構成は以下の通りである。

はじめに

第一章 人口移動の歴史——民国期と計

画経済期を中心に

1 民国期の地域間人口移動

2 計画経済期の人口移動

むすび

第二章 改革開放時代の人口移動——市

場化・国際化は人口大移動を引き起

こす

1 地域間人口移動の全体像

2 国際人口移動の新展開

むすび

第三章 農民工とその政策——農村と都

市による二重構造の変容

1 農民工の全体像

2 移動自由化の道

3 農民工政策の変遷

むすび

第四章 農民の出稼ぎとその影響——

「三農問題」は解消するか

1 農民所得と非農業就業

2 出稼ぎ農家と出稼ぎ労働者

3 出稼ぎの規定要因——地域、世帯

および個人の視点から

4 出稼ぎによる人口構造の歪みとそ

の影響

むすび

第五章 農民工問題の諸相——農民工は

国民になれるか

1 農民工の就業問題

2 農民工の生活と社会保障問題

3 農民工の子供の教育問題

4 農民工の人権問題

むすび

第六章 中国経済はルイスの転換点を超

えたか——農民工不足の社会経済的

背景

1 転換点の到来をどう捉えるか

2 「民工荒」の背景——労働の供給

サイド

3 「民工荒」の背景——労働の需要

サイド

むすび

おわりに

以上の構成から見られることは、中国
の人口移動が単に天災などによる自然発
生的なものではなく、戦争や内乱による
もの、為政者による政治的意図を反映し
たもの、さらには経済的状況の要因によ
るものなどであった。とりわけ本書の中
心に位置づけられて取り扱われている
「農民工」の問題は、中国経済の二重構
造を反映し、象徴するものにほかなら
ない。

都市と農村の格差は、人民共和國成立

の初期から存続してきており、農民・農業・農村を犠牲にして工業化に邁進してきた結果であった。それが、改革開放政策の施行に伴って、特に最近になって様々な面から取りあげざるを得なくなってきた。これは、都市と農村とりわけ内陸部農村との格差が拡大し、農村からの出稼ぎ労働者の都市での定着状況が、規模においてはもとより、問題の深さと多様性においても、旧来と比べて大きく変化してきたからである。

中国では「現代化建設」が「商品経済化」として提起された後、さらには近年の対外開放政策による大量の外資導入の結果として、様々な矛盾が多方面で表面化していることも大きな問題であった。

各種の調査による統計数字の公表により、農民とりわけ内陸部の農村経済と農民の貧しさは極めて明確に示され、矛盾のはけ口としての「農民工」をめぐる問題が取りあげられるようになった。

著者はまず、第一章の後半部で、中国では「市場経済では考えられないような人口移動が政策的に進められた」とし

て、人口移動を「歴史的に眺めて」きている。著者は、「民国期と毛沢東時代の地域間人口移動」について、相対水準、方向性、メカニズムを明らかにする方向で、全体的な分析を進めた。

歴史的に見た場合、民国期では、東北地方における人口移動が、「中国の新大陸」の開拓として進められたことによるものと指摘されている。ここでは、とりわけ山東省、河北省からの人口移動が急増したのであった。さらにこの地域では、日本の占領下という特異な状況での変化が取りあげられ、日本と朝鮮からの移民についても指摘されている。これは日本の支配という事態の下で、人口移動の大規模な変化を見て取ることができ

る。新中国の経済建設は、初期の段階から重工業優先政策をとる形で、工業の発展に必要な資金、原材料や労働者への低価格の食糧供給を農業・農民の犠牲によって得る制度を固定化させた。この構造が、都市と農村の格差を生み、さらに「三農問題」をもたらした状況でもあつ

た。

毛沢東の「計画経済期」とされるこの時期において、都市農村間の労働力移動に関連する状況で象徴的な事柄としては「大躍進運動」による混乱が指摘される。農民は、一旦都市労働者として大々的に動員された後に、政策の失敗が明確化して後、都市に集中した農民を強制的に帰農させた。このように、農民は政策的に振り回されてきたのであった。

その後導入された「戸口（戸籍）制度」は、農民を都市から隔離する手段として用いられ、実際に農民が都市に移住することを阻止した。それは、「戸籍」無しには、食糧の供給をはじめとして、各種の社会サービスが受けられなかったからである。こうした政策により、都市農村間の人口移動はほとんど見られなくなった。著者は「それは農村都市間の社会移動が少なかっただけでなく、職業階層間の社会移動も鈍く、社会が閉鎖的な状況にあった」ことを示したと指摘している。

次に「改革開放期」においては、農民

が地元から離れるようになった事態に依りて時期区分が行われ、都市への人口移動の状況が語られた。著者は、この時期の変化を「社会の流動化を表す現象」とし、二重構造の解体、市民社会の到来」と肯定的に評価している。

しかし、これは資本主義的商品経済への展開に他ならず、それには各種の問題が随伴せざるを得なかつた。「農民工」の大量出現という特殊な現象は、農村経済の疲弊とともに、都市における経済の急速な発展と階層分化の状況を急速に顕在化させた。

問題は、こうした状況にあり、都市工業と農村との相互関係による発展をどう調整するかにある。その展望は、現状からすれば、全く不可能だとは言えないまでも、極めて困難だと言えよう。

本書の第三章から第五章にかけては、「農民工」として現れた、出稼ぎ農民の事態と各種の政策、問題点を様々に論じている。なかでも国務院の通達による「農民工四〇条」では、「都市農村間のアンバランスな発展を是正し、農民工の合

法的な権益を保障し、農村余剩労働力の移動を誘導し、全面的な小康社会の建設プロセスを推進する」とだと強調された。具体的な方策としては、農民工に対する、移住、職業選択、就労条件、社会保障、住宅、子女教育、職業訓練等を都市労働者並みに整える方針が打ち出された。

著者はこれを高く評価するものの、こうした方向の提示は、農民工がこれまでひどく抑圧され、差別されてきたことの裏返しだとも指摘している。農民は、中国の経済システムのなかで、生活面において都市住民との間に大きな格差があり、極めて不利な状況に置かれてきた。

先に触れた「戸籍制度」によつてもたらされた差別は、その典型的な事例であると言えよう。農民は移動の自由をはじめとして、各方面において全面的な束縛を受けており、様々な負担と差別を背負わされてきた。

著者は、人口センサスの分析を通じて、農民工は比較的学歴が高く、働き盛りの男性が中心だったという点を指摘

した。さらに全体像から見た移動の規模からいえば、例えば二〇〇六年には人口センサスでは都市部の住民は五億四〇〇〇万人となつており、公安部による戸籍統計では同年の都市人口は三億六〇〇〇万人で、両者の差となる一億八〇〇〇万人が、農民工およびその家族だと計算されている。

つまり、本来農業の担い手となるべき壮健な労働力が都市へ流出してしまったことは、農業・農村の発展と安定を保持する上でマイナスとなつてきたのは言うまでもないことであつた。

さらに地域別に移動状況を見ると、移動元は安徽、四川、湖南等の貧しい中西部地域で、移動先は上海、江蘇、浙江、山東、福建、北京等の直轄市、省都や東部沿海地域の大都市であつた。

これは、沿海地域において外資企業をはじめとする工業企業を主とした経済発展を見ることによるものである。

「農民工」のこうした特徴は、中国に特有なものではない。とりわけまた、農村から都市への出稼ぎ者としての資質に

おける特徴と現在の状況は、必然的にもたらされた事柄だと言える。

それについて著者は、個別地域において相当に歪んだ状況となっているのを指摘した。著者の主張では「出稼ぎ労働」は「三農問題」を解決する一つの方法と期待されているとした。

ただ問題は、「農民工」をめぐる労働条件の悪さや、生活環境のひどさである。さらにまた、より大きな角度から言えば、農業の発展方向をめぐる議論として提出すべきである。

農業の発展は、食糧の生産と供出を主としたかつての状況から、商品経済化の進展によって経営の多角化と流通改革が進んだことが観察される。商品経済化は、商品市場、資金市場から労働市場の形成に到るまで急速に進められた。結果として、都市における格差や差別と都市農村間の矛盾の激化により問題がより厳しくなった。

最後に本書では、経済開発論において、労働力が無制限に供給される状態からの変化を取りあげた、有名な「ルイス

モデル」における「転換点」に、「達したか否か」の問題を取りあげている。著者は、その計量モデルにおいては、具体的な数値の面からは、転換点に達したとは必ずしも言えないとし、農民工にとっての問題は、むしろ各種の社会保障の整備こそが切実だとした。「すべての政策

は、今まで抑圧されてきた農民工の一人ひとりの生存状況をいかにして速く改善できるのかに尽きる」と強調している。まさに、この点こそが重要な問題なのである。

「抑圧された農民工」は、都市では「3K」（くらい、汚い、きつい）労働の担い手として位置づけられた。さらに、とりわけ急速に増大してきた外資企業による労働集約的な生産において、低賃金労働として位置づけられてきた。

これが、中国の経済発展にとって大きな貢献を果たす基礎となった。しかし二〇〇四年頃から農民工の流れは大きく変わり、労働力不足が重大な社会的現象として問題となり、賃金コストの上昇が進んだ。これは、特に中国市場に進出した

外資企業にとって、極めて大きな状況変化になった。

この問題は「民工荒」と呼ばれ、外資企業が採算を取る上で、ゆゆしき問題となった。ルイスモデルへの言及はこうした状況を背景としたもので、「労働力の無限供給」という前提が失われてきていることによる。著者は計量モデルで明らかにされるべき事と、現実の問題とされるべき事とを分けるべきだと主張している。

計量モデルへの言及としては、中国社会科学院人口研究所の意見をはじめとして様々な見解があるとす。これに対して著者は「伝統的農業部門の限界労働生産性と近代的非農業部門の賃金が一致するかどうかを計量的に実証分析する必要がある」と指摘している。

本書は、長年にわたって農村調査を手がけてきた著者が、農民工の現状について、統計数字を整理しつつ丁寧に現状を明らかにしている。理論的整理からしても、現実には農民工が置かれてきた状況の改善は、当然の課題だと言えよう。

最後に、中国の今後の政策課題として四つの点が挙げられているのは、いずれも重要な事柄である。第一に、雇用、賃金、福祉等における戸籍差別をなくす努力をすること。二一世紀の今日に至っても「農民・農民工を戸籍で差別し続けている現実」があるという中国に対する認識は、極めて重要である。

第二に、かつてのような「使い捨て型の雇用慣習」から脱却するのに権利保障と研修制度の拡充が強調され、「今の中国には労働の量的不足ではなく質の面の蓄積が少ないという事実がある」として「労働行政の仕事」が必要だと指摘されている。

第三に、労働集約型産業の育成・成長を促し、農村過剰労働力の解消、農家所得の向上に資する政策を採り続けるべきだとされた。ただ、これによる「外資利用戦略」は「農民工」の労働条件の悪化と関連させて考えることも必要である。

第四に、「農家の若者が農村から姿を消しつつある中で」農業生産力をどのように維持し増強していくかが「喫緊の課

題」となっていることも重要であり、「どの程度の農業予算が確保できるか」を注目点だとしている。

本書は、直面する問題としての「農民工問題」を通して中国経済を理解する上で大きな意義を有していると評価できる。ただ、「三農」問題の解決にあたり、とりわけ中国経済における農業・農民の保護と経済発展の質的な変化への展望を如何に為すべきかについては、中国の農業問題の深刻さから、政策が今後さらに進展することに注目せざるを得ないとともに、大いなる議論の展開を待ちたいところである。